

## 大学がかかわる地域振興策の一例

### —重要無形民俗文化財『八女福島燈籠人形舞台背景幕制作事業』を中心に—

A Regional encouragement method by University cooperation

美術学科

井上 友子・青木 幹大・佐藤 慈・星野 浩司・佐藤 佳代・南 聡・荒巻 大樹

Tomoko Inoue

#### 1. はじめに

2013年11月中旬、八女福島燈籠人形保存会および八女市教育委員会から本学芸術学部へ八女福島「燈籠人形芝居の舞台背景幕の修復あるいは制作」事業が委嘱された。「修復あるいは制作」というあいまいな言葉で表現する理由は、この事業が委嘱された当初、既存幕「修復」と新幕「制作」のどちらがより良い選択であるのか判断することができなかったからである。

協議の結果、本学芸術学部美術学科で燈籠人形芝居の舞台用新背景幕を制作することが決まり、一年ごとの制作数、手順、奉納日などが話し合われた。

「燈籠人形芝居」とは、秋分の日をはさむ3日間、毎年行われる殺生を戒める「放生会」行事に庶民の気保養として八幡宮の境内で演じられる「からくり人形」による「浄瑠璃芝居」のことである。この「燈籠人形芝居」は、1952（昭和27）年に福岡県の無形文化財に、また、1977（昭和52）年には国指定の重要無形民俗文化財（以下「重文」）に指定され、八女市が誇る伝統的文化となっている。

一方「舞台背景幕」とは、「燈籠人形浄瑠璃芝居」の舞台を演出する大道具のひとつ「風景幕」のことである。

2015年の時点で243年目を迎えた「燈籠人形芝居」は、江戸時代の儉約規制や昭和時代の二つの大戦下での上演禁止を経て現在に伝承されている人形を使った浄瑠璃芝居による民俗文化である。

浄瑠璃芝居用のからくり人形は、明治末期から昭和初期にかけて行われた制作を最後に、近年まで80年以上そのままの状態にあり、破損が著し

かった。同様に、戦後発見された背景幕も損傷が激しかった。

八女市では、人形に関しては愛知県のからくり人形師に人形の修復・制作を委嘱し、2008年に1体の修復と8体の制作が完了していた。しかし背景幕の修復・制作については、戦時中に散逸してしまっただ数枚の問題も含め、現存してはいるものの加速度的に老朽化と損傷が進む現状に頭を悩ませていた。

八女市教育委員会と燈籠人形保存会のメンバーは背景幕修復事業の模索を検討してはいたものの、経済的理由により計画は思うように進んでいなかった。しかし、2013年、本学芸術学部元教授の仲介で美術学科に調査が依頼され、ようやく「背景幕」の修復・制作が実施されることになった。

#### 2. 研究の枠組み

本研究は行政と伝統文化の保存団体が重要無形民俗文化財の保護と伝承を目的とし、本学芸術学部へ調査・研究・修復上の援助を期待したことを発端とする。

また大学としては芸術学部が有する知的・人的・技術的援助を行政や保存団体に提供することで彼らの要請に応え、同時に学生が芸術的専門能力を向上させる良い機会を得ることを期待した。

重文の修復・保存・維持に現役の学部学生がかかわることは稀有なことであり、彼(女)らの専門技術の鍛錬にはまたとない経験である。

このようなことから、「八女福島燈籠人形舞台背景幕制作事業」が、現存する文化財を後世に伝えるために大学が何をすべきかを世に問う良い凡例となったといえるのである。そして、この事業

は、芸術学部ゆえに可能となった協力活動が地域社会にまだまだ多く存在していることをもイメージさせることとなった。このような観点から、「八女福島燈籠人形舞台背景幕制作事業」が文化財保護の一つのケースワークとなった。

具体的な実施上の枠組みは、芸術学部日本画担当教員とコース学生が現存する背景幕の調査を、また理論担当の教員が燈籠人形と背景幕の歴史の変遷を調査し、バックグラウンドに即した制作と歴史的整理を行った。

### 3. 「燈籠人形成立の歴史」と「屋台および背景幕の重要性」

#### 3-1. 燈籠人形の歴史

燈籠人形芝居に使用している「人形」は、高さ80～90cmほどの木製の「からくり人形」であり、これを「燈籠人形」という。この「燈籠人形」は、その呼び名から想像されるような照明機能を備えた「ヒトガタ」の燈籠とは異なり、照明機能のない「ヒトガタ」の木製仕掛け人形である。とすると、誤解を招くような「燈籠人形」という呼び名の由来は、1744(延享元)年、熊本県山鹿市の大宮神社から奉納された「燈籠(松明)」と八女福島に伝わる「木製の飾り人形」が融合したことにはじまる。1761年の時点では、「燈籠の光によって照らし出される飾り人形の陳列奉納」であった「木製の人形」は、11年後の1772年に「人が操作して動くからくり人形」へと変わり現在の姿に定着している。

ちなみに、八女福島に伝播した熊本県山鹿市に伝わる「燈籠」は、呼び名通り「機能としての燈籠」である。材質は、室町時代を境に「金属製」から「紙製」の燈籠に変わり、現在では熱電源を含め180グラムほどに軽量化されている(図1)。現在みられる金色紙・銀色紙の「紙製燈籠」は、毎年8月15日から17日にかけて大宮神社で行われる「山鹿燈籠まつり」で頭上に紙製の燈籠を掲げた千人の女性が踊りを披露する一大イベントの重要な小道具である。

さて、八女福島の燈籠が、「燈籠(松明)機能」



図1 山鹿紙燈籠

を備えず「人が操作して動くからくり人形」になった歴史と、その後、人形浄瑠璃芝居として舞台上の出し物へと変容した歴史は以下の通りである。

太古から人の形に切った紙は「病・災厄・穢れ」の身代わりになり、また「神の遣い」として信仰の対象となっていた。8世紀末から12世紀には「人形回し・傀儡回し・木偶回し」と呼ばれる興業師による「人形劇」が社寺近郊で興行されるようになり、人形劇が神仏への奉納行事として定着する。

浄瑠璃(劇場音楽や音曲)については、平家物語を語る琵琶法師の「平曲」に端を発し、15世紀以降になると、楽器の流行が琵琶から三味線に移った。その後三味線の音色と人形劇が融合し、1596～1615年(慶長年間)の京から、江戸に伝播し、大坂で繁栄を極め、地方都市へと波及した。この三味線による伴奏と人形劇の融合という劇場娯楽は後年の文楽座設立を促し人形浄瑠璃芝居形成の基礎となった。

以上のような過程を経て形成された人形浄瑠璃芝居は、その代名詞ともされる義太夫節の竹本義太夫が1684年に竹本座を設立し1705年に近松門左衛門を座付作者として迎え、一方で、1703年に竹本座から独立した豊竹若太夫が「豊竹座」を設立したことで全盛期を迎えた。1734年には、人形遣いが「一人遣い」から「三人遣い」へと増えたことから操作が複雑化し、人形浄瑠璃の人気はいつそう高まることになった。

現在の福岡県八女市である筑後上妻郡福島町では、1754（宝暦4）年に起こった百姓一揆で、前年1753（宝暦3）年に21歳で福島町の大庄屋を継いでいた松延甚左衛門種茂（1733～1796年。貫嵐（カンラン）とも呼ばれる）の家が打ち壊された。甚左衛門種茂は3年後の1757（宝暦7、25歳）年、長崎を経て大坂に出奔し、大坂で義太夫節の豊竹駒太夫と出会った。2年後の1759（宝暦9）年、甚左衛門種茂（27歳）は、道頓堀・豊竹座で福松藤助（陶芋（トウウ））のペンネームにより読本浄瑠璃「宇賀道者源氏鏡（ウガドウジャゲンジノカガミ）」を発表し、人形浄瑠璃作者としてデビューした。しかし大坂では、次第に人形浄瑠璃人気に陰りがさしはじめ、1765（明和2）年には豊竹座が閉座したことから、甚左衛門種茂は1771（明和8）年12月に39歳で筑後上妻郡福島町に帰郷している。翌年1772（明和9、安永元）年、甚左衛門種茂は大坂で学んだ「からくり人形」の技術を郷里に伝え、「燈籠の光によって照らし出される飾り人形の陳列奉納」は、「燈籠の光に照らされ、三味線や太鼓の音色と語り手の声に合わせ芝居を演じるからくり人形」となった。

### 3-2. 「屋台」および「背景幕」の重要性

燈籠人形を上演するためには、「屋台」とよばれる舞台小屋、人形の操作、三味線や太鼓などの鳴り物、背景を飾る大道具、小道具などが必要である（図2）。

「屋台」は釘や鋸を使用しない3層2階建ての構造であり、「放生会」の3日間だけのために毎年生まれ、放生会後には「解体」される。「屋台」には「小型」と「大型」の2種類あり、前者は幅15.46m、奥行き6.895m、高さ8.01m、後者は幅14.83m、奥行き7.67m、高さ8.845mの大きさである。「小型」と「大型」の使用区別は、奉納行事として演じられる燈籠人形芝居の芸題による（図3、4）。

2層目となる屋台1階部分には漆の朱塗り舞台、3層目となる屋根裏部分には三味線、太鼓、語り手、歌い手などによる演奏・歌唱・語り演じら



図2 屋台

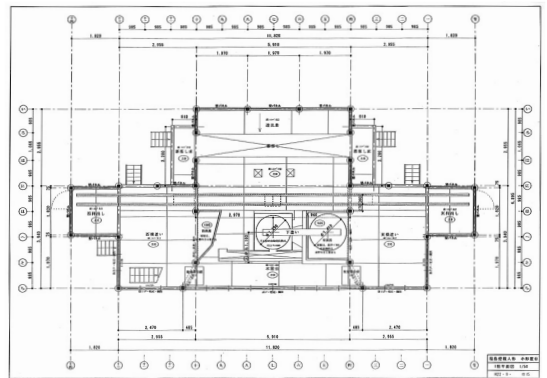


図3 小型屋台1平面

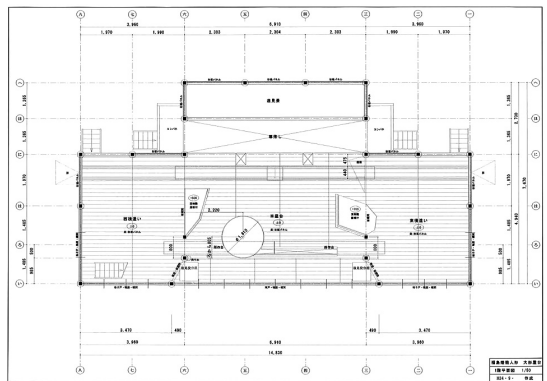


図4 大型屋台1平面

れる囃子場が設置され、1層目となる屋台地階部分には、舞台下の「下遣い」が、2層部分の舞台袖の「横遣い」役と共に人形操作をする（図5、6、7）。観客は野外に設置された椅子や境内の石垣





図5 2層目



図6 3層目



図7 2層横遣い



図8 観客

の上に座り「屋台」の2層（1階）中央部分で演じられる人形芝居を觀賞する（図8）。

人形芝居は、上記に掲げたスタッフのほか、人形操作、人形衣装の早変わり、背景幕の切り替えなどを専門に担当するものなどが必要であり、その総数は50名を超えることもある。上演回数は午前と午後に分け、一日5回である。

朱塗り舞台奥に天井から吊り下げられる背景幕は「遠見」とよばれ、舞台中央で演じる人形芝居の場面設定を視覚的に説明・補強する重要な要素である。背景幕は、「素抜き（スヌキ）」と呼ばれる人形衣装の早代わりと共に床に勢い良く落とされ、心理的なクライマックスを演出する重要な道具であり、演じ手と観客との間に共有する臨場感を発揮する効果を高める。しかし、背景幕はそのクライマックスごとに床に激しくたたきつけられるため、損傷が著しい。前述したように、人形については、2004～2008（平成16～20）年、愛知県のからくり人形工房（有）萬屋仁兵衛工房に修復・制作を依頼し完了している。そして、懸案事項のまま積み残されていた背景幕は、本学芸術学部の学生が新たに制作することで、ようやく重要無形民俗文化財「八女福島の燈籠人形」の両輪が揃うことになる。

#### 4. 芸術による地域振興策の実例

##### 4-1. 芸題について

燈籠人形芝居の芸題には、2014年に上演され



## —重要無形民俗文化財『八女福島燈籠人形舞台背景幕制作事業』を中心に—

芸 題	屋台	第1景	第2景	第3景	第4景	第5景	第6景
吉野山狐忠信 初音の鼓	小型	吉野山 桜遠景 【H26制作済】	吉野山 桜の景	深山夜明けの景	紅葉の景	吉野勝手神社の景	
薩摩隼人国若丸 厳島神社詣		厳島神社 全景	厳島神社 春景色 【現存しない】 (吉野山で代用)	厳島神社 回廊の景	厳島神社 紅葉の景	厳島神社 参詣道の景	
春景色筑紫渦 名島詣	大型	福島城の景	名島の景	名島帆柱石の景	多々良川の景	宮崎 千代の松原の景	名島弁財天春景色 【現存しない】
玉藻の前		大内山の春	河畔の月	あやめ園	湖畔の松	もみち谷	那須野の原

図9 芸題と背景

た「吉野山狐忠信初音の鼓」、2015年に上演された「薩摩隼人国若丸厳島神社詣」（いずれも小型屋台用）、2016年上演予定の「春景色筑紫渦名島詣」、2017年上演予定の「玉藻の前」（いずれも大型屋台用）の4編が存在している。歴史的に歌舞伎の演目に大きな影響を与えた人形浄瑠璃と密接な関係にある燈籠人形芝居には、多くの芸題が存在したと想像される。しかし、保存会会長談によると、伝承されたのは上記に掲げた4芸題のみであり、その他の脚本は失われたため、燈籠人形芝居の芸題が人形浄瑠璃や歌舞伎のどの演目とかかわりを持っていたのかかわからない。芸題脚本の喪失のみならず、舞台背景幕の多くも散逸してしまい、現在は20枚を残すだけである。

ちなみにかつては、小型屋台で演じられる芸題には5枚の背景幕が、大型屋台で演じられる芸題には6枚の背景幕が使用され、本来存在すべき上記4芸題用の背景幕総数は22枚を数えるべきである（図9）。

#### 4-2. 制作期間と制作手順について

本学で実施された背景幕制作は、指導する日本画教員が日本画専攻の学生用に教育プログラムを組んだ。

まず、2014年に上演された「吉野山狐忠信初音の鼓」第一幕「吉野桜の風景」では、2014年3月に現地調査を行い、4月から8月まで日本画アトリエで制作を行い、9月9日に八幡宮境内で燈籠人形保存会に手渡された。同様に次年度2015年に上演された「薩摩隼人国若丸厳島神社詣」第一幕「厳島神社の風景」でも、3月に現地調査、

4月から8月まで制作が行われ、9月18日に手渡された。

背景幕制作に移る前に、保存会から提供される背景幕用のキャンバス布地と染料との相性実験が繰り返された。実験の結果、日本画用の水干絵の具や絵画制作に広く用いられるアクリル絵の具では、上演ごとに天井から強く床にたたきつけられる用途には耐えられず、色の剥落が避けられないことが分かった。そこで、色止め剤の含まれた布地用染料を顔料として用いることが決まった。

下絵制作から本制作にいたるまでの手順は以下の通りである。

- ① 遠景の「桜の木々」（2014年度）「厳島神社の鳥居」（2015年度）を54×38cm大の画用紙にスケッチする。
- ② ①を水彩で着色する。2014年度の「桜の木々」に関しては「花びら」だけ抽出し、別に準備した画用紙に拡大して描く（図10）。



図10 花びら抽出

- ③ ①②の遠景スケッチを天井から吊るした紙の上にプロジェクターで原寸大に投影し、オブジェの輪郭線を黒ペンで転写する。
- ④ ③の上にベージュ色の木綿布地を重ね置き、プロジェクターの光によって透かし出された輪郭線を白色の染料でトレースする。2014年度の「桜の木々」に関しては「花びら」を15cm大に拡大転写し、白色染料で輪郭線のトレースを行う（図11）。
- ⑤ 本制作用の背景幕と同素材の木綿生地の色見本を作成し、発色・混色効果のサンプルをとる。
- ⑥ 壁につりさげた本制作用の背景幕生地の前に重文の燈籠人形を置き、全体のバランスを確認しながら完成させる（図12）。



図11 白色染料トレース



図12 全体バランスを見ながら完成

## 5. まとめ

1772年まで遡り、今年で243年目を迎えた「燈籠人形芝居」の伝統を残し後世に伝えるため、2008年、保存会は新たに8体の人形制作と1体の人形修復を完了し、現在は背景幕の整備が本学芸術学部の日本画専攻の学生によって進められている。

人形浄瑠璃と深いかかわりを持ち、歌舞伎の演目を踏襲すると推測される「燈籠人形芝居」の脚本は、江戸時代の儉約規制や昭和時代の二つの大戦下において上演禁止されたことから4芸題を残すのみで、ほかはすべて消失してしまった。そして、背景幕については、残された4芸題用の22枚のうち2枚が散逸し、やはり、20枚を残すのみである。

本研究では、大学が保有する知的・人的・技術的潜在力を活用することで、わずかに残された文化遺産を実体としての「モノ」や歴史あるいは現象としての「コト」として後世に残すことができ、それが地域振興策の優れた一例となることを見てきた。また大学教育においても、地域に残された稀少な文化遺産を教材に活かし、社会貢献に直接つながる生きた教育を行うことができることが証明された。

## 参考文献

- 1) 『八女福島の燈籠人形 復元・修理事業報告』2009、八女福島の燈籠人形保存会、pp.例言、1,5～26.
- 2) 『八女福島の燈籠人形』カタログ、平成27年9月、pp.9～21.
- 3) 芳賀日出男『日本の民族 暮らしと生業』H26年、角川ソフィア文庫
- 4) 廣瀬久也『人形浄瑠璃の歴史』2001年、戎光祥出版
- 5) 山鹿燈籠の由来パネル、山鹿燈籠民芸館